

# UNION Foundation For

# Ergodesign Culture

# 2024



公益財団法人 ユニオン造形文化財団  
2024(令和6)年度 事業内容報告書

UNION Foundation For Ergodesign Culture  
Annual report 2024

# CONTENTS

02 ごあいさつ

03 ユニオン造形文化財団 組織

04 財団の概要

05 調査研究 助成

11 国際交流 助成

13 在外研修 助成

15 第31回ユニオン造形デザイン賞

ごあいさつ

Greetings



公益財団法人 ユニオン造形文化財団

理事長 立野 純三

空間造形デザイン分野における各種活動支援の為に助成並びに優れた創作活動の顕彰を行い、芸術文化の発展への貢献、そして国内にとどまらず広く世界へ開かれた当財団の活動も、おかげさまで31回を迎えました。今回も世代をこえて各界より多数のエントリーをいただき、誠に喜ばしい限りです。

本年度の助成活動に関しましては、安藤忠雄先生をはじめとする選考委員の方々の厳正な審査により、調査研究部門6件、国際交流部門2件、在外研修部門2件の計10件に対して実施させていただきました。

また、顕彰事業の第31回ユニオン造形デザイン賞公募に関しましては、国内外の大型プロジェクトで活躍し、注目を集める建築家の永山祐子先生に審査員をお願いし、「100年の建築」という興味深いテーマを頂きました。

100年後という少し遠い未来を設定し、自分が生まれ、人生を終えるスパンで建築の時間をとらえ、物質に縛られることなく自由に「100年の建築」を考えることをテーマに多くの優秀な作品の応募があり、受賞が決まり喜ばしい限りです。

これからも我が国の芸術文化の発展への一助となるよう、活動を続けていく所存です。

どうか今後とも温かいご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2025年2月

## ユニオン造形文化財団 組織

### ■役員

理事長 立野 純三 (株)ユニオン 代表取締役社長

常務理事 小川 進吾 (一財)産業医学研究財団 理事長

理事 山本 博史 (株)小倉屋山本 代表取締役社長  
吉本 晴之 (株)大阪マルビル 代表取締役社長

監事 武本 勝司 武本公認会計士事務所 公認会計士・税理士  
南川 和茂 南川和茂法律事務所 弁護士

### ■評議員

嘉納 秀一 三宝電機(株) 代表取締役会長  
小林 隆太郎 (株)あみだ池大黒 代表取締役会長  
長谷川 恵一 学校法人エール学園 総長  
吉川 秀隆 タカラベルモント(株) 代表取締役会長兼社長

### ■選考委員

安藤 忠雄 建築家・東京大学 特別名誉教授  
絹谷 幸二 画家・東京芸術大学 名誉教授  
豊口 協 長岡造形大学 名誉教授  
古山 正雄 京都工芸繊維大学 名誉教授  
蓑 豊 兵庫県立美術館 名誉館長・公益財団法人香雪美術館 館長  
松村 秀一 神戸芸術工科大学 学長

### ■事務局長

柴田 昌宏



## 財団の概要

■名 称 公益財団法人ユニオン造形文化財団

■所 在 地 事務局／〒550-0015 大阪市西区南堀江2丁目13番22号  
TEL.06-6532-8764

■設立年月日 1994年5月24日

■主 務 官 庁 内閣府

■目 的 空間デザイン文化の振興と向上を図るため、同分野に関する調査研究及び国際交流に対する助成を行うとともに、同分野の優れた創作活動の顕彰を行い、もって我が国芸術文化の発展に寄与することを目的とする。

■業 務 内 容 空間造形デザインに関する調査研究及び  
国際交流(若手芸術家の在外研修を含む)に対する助成  
空間造形デザインで優れた創作活動の顕彰  
その他目的を達成するために必要な事業

■事業一覧 2024(令和6)年度

| 助成・顕彰 | 件数 | 金額       |
|-------|----|----------|
| 調査研究  | 6  | 9,000千円  |
| 国際交流  | 2  | 2,000千円  |
| 在外研修  | 2  | 3,600千円  |
| 顕 彰   | 7  | 2,900千円  |
| 計     | 17 | 17,500千円 |

## 山出 美弥

Miya Yamade

立命館大学 政策科学部 准教授

## ●共同研究者

十亀 昭人

東海大学総合理工学研究科 准教授

荒木 慶一

京都大学大学院工学研究科 教授

## ●研究課題

本研究は、宇宙での長期滞在における居住空間の快適性向上に寄与するインテリアデザインの可能性を探ることを目的としている。

宇宙飛行士のように特殊な訓練を受けた者でも閉鎖空間での生活ストレスを避けることは難しい。現在のISSは宇宙開発の研究・実験に特化したデザインとなっており、心的快適性が考慮されているとは言いがたい。近年、世界の宇宙ベンチャー起業家、研究者によって活発な宇宙開発がなされ、民間人の宇宙滞在も現実味を帯びてきたが、実際に宇宙に長期滞在した経験を持つ者も未だ少ないことから目安となるインテリアデザインの指標が示されていないことが問題としてある。本研究は、宇宙に長期滞在したことがある者（宇宙飛行士）へのヒアリング調査と実務家として宇宙インテリアデザインの構想・設計に取り組んでいる英国建築家との協働を通して、宇宙居住空間で心理的に快適に過ごすために必要な宇宙インテリアデザインの可能性を宇宙における人間工学的視点と心的快適性の融合から模索していく。ヒアリング調査対象者として若田光一氏、野口聡一氏、山崎直子氏などを想定している。

## ■主題

宇宙居住空間におけるインテリアデザインの可能性  
—国際宇宙ステーションISS長期滞在者の経験から—

## ■研究計画の概要

## (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

本研究は、宇宙での長期滞在に向け、人間工学的視点と心的快適性の融合を目指した宇宙居住空間におけるインテリアデザインの可能性をISS長期滞在者（主に宇宙飛行士）の経験から模索することを目的とする。

1950年頃から始まった人類の宇宙開発の歴史は、21世紀を迎え新たな展開をみせている。例えば、イーロン・マスク氏率いるSpace X社はクルードラゴンを開発し、米国NASAより地球とISSとの往還に関わる事業を請け負う他、火星居住施設構想の中で2050年までに100万人を火星に送ることを目指している（図1）。また、NASAとESA（欧州宇宙機関）が主導する月面居住施設の設計思想と技術開発では、月面長期滞在を（300～500日）とし、基地となるアルテミスキャンパス建設を目指して居住施設の技術開発が進められている。しかしながら、宇宙での滞在が長期化する一方「居住施設」としてのISSの在り方や月面、火星での滞在中、快適に過ごすことは心身の健康維持の観点からも重要であり、その基盤の構築を実際にISSに長期滞在した者（宇宙飛行士）の視点から明らかにする点に本研究の意義がある。本研究では、宇宙居住空間においてどのようなスケール（空間寸法、空間容積、家具）が適切なのか、快適に過ごすためにはどのような空間が必要なのか、窓など外部との接点はその程度必要なのか、インテリアデザインはどのようなものが好ましいのか等、低重力や放射線などの宇宙特有の環境の違いなども踏まえ、今後、実際に設計を請け負うであろう実務家（英国ヘザウィック・スタジオを想定）のデザイン協力を得ながら、宇宙居住空間における心的快適性を向上させるインテリアデザインの指標を探ることを目的とする。また建築のしつらえに関する設問と同時に、「なぜ人類は宇宙に向かうのか」という疑問に対して文化人類学的な観点から、どのような意義を見出しているのかについても宇宙滞在経験者の見解をまとめる。

ヒアリング調査の対象者は若田光一氏（滞在累計504日）、野口聡一氏（滞在累計約330日）、山崎直子氏などを想定している。

注1) イーロン・マスク火星移住へ向けての取り組み：  
<https://space-journal.jp/business/368>  
（2023.12.11閲覧）



図1 米国Space X社の火星居住施設構想注1)

## (2) 実施計画の大綱

我々、調査グループは宇宙建築学（Space Architecture）を「地球外に存在し、人間が暮らすために設計・建設される構造物、あるいはその研究及び理論のこと」と定義し、研究を進めてきた。近年、ISSの建設により宇宙での人の滞在時間が以前よりも長く求められる時代へと移行したことにより、「居住性」「意匠性」「施工性」などの建築学的な視点からの研究開発が求められている。

本研究は、以下2つの調査から成る。

## A. 宇宙飛行士へのヒアリング調査

ここでは、実際にISSにて長期滞在を経験した宇宙飛行士等を対象に、どのようなスケール（空間寸法、空間容積、家具）が適切なのか、快適に過ごすためにはどのような空間が必要なのか、窓など外部との接点はその程度必要なのか、インテリアデザインはどのようなものが好ましいのか等についてヒアリングを行い、現在の課題を明らかにする。加えて、「なぜ人類は宇宙に向かうのか」という疑問に対して文化人類学的な観点から、どのような意義を見出しているのかについても宇宙長期滞在者の見解をまとめ、宇宙居住の発展を図る。

## B. 英国ヘザウィック・スタジオとの協働によるインテリアデザインの具現化—人間工学的視点から—

調査Aによって得られた結果を用いて、英国ヘザウィック・スタジオ勤務の鶴巻崇氏（意匠設計）と協働し、具体的な寸法、パース図等の作成を通して宇宙インテリアデザインの可能性を探る。また作成したパース図を用いて、地上での生活の類似性や相違点から、宇宙居住での適応と心的快適性の向上を検討する。

## (3) 研究成果の公表予定

日本建築学会計画系論文集

日本建築学会大会（関東）2024

宇宙科学技術連合講演会

GLOBAL MOON VILLAGE WORKSHOP &amp; SYMPOSIUM

土木学会月面建設技術シンポジウム

などを想定

## 中川 純

Jun Nakagawa

東京都市大学 建築都市デザイン学部 建築学科  
准教授  
専攻分野／建築環境学・建築情報学  
建築設計・建築計画

## ●研究課題

建築におけるシークエンスには様々な研究があるが、いずれも視覚を中心としたものであり、日射や温湿度、気流など、熱的シークエンスを伴った研究はなされていない。研究代表者は、従来では難しかった移動を伴った人体の近傍における不均一・非定常な温熱環境の測定と評価を行うことを目的として、空気温度・相対湿度・照度・風速センサを備えたウェアラブルセンサを開発した。本システムによって人間の行動や心理・生理を加味しながら、我々はあるとき快適・不快と感じるかをライブ状態で計測することで、不均一・非定常な熱的快適性に関する知見を得ることが可能になる。省エネ法の改正などにより建築の外皮性は高まってきたが、人間の行動と熱的なシークエンスを考慮すると、法的な規制による外皮（断熱）ラインとは異なる、もっと豊かな境界面が築けるはずである。本研究は、不均一な温熱環境を伴った建築を人間の行動と熱的なシークエンスから再解釈することで建築の可能性を広げることを目的としている。

## ■主題

## 熱的シークエンスを伴った環境デザインに関する研究

## ■研究計画の概要

## (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

## ■研究の意義

現代は転換期で、建築デザインにおいても技術的なエビデンスが求められる時代になった。とくに、地球規模の環境問題とエネルギー問題に対し、世界各国が一致団結して取り組もうという、現代における最大級の政治的正しいさに後押しされるかたちで、建築の環境デザインが要請されている。地球環境を守るための正しい技術は、今後も建築にまつわる基準や法制度をつくり続けることで、建築はますます不自由になっていくと思われる。しかし、建築は時代の制約を受ける技術的存在でもあるため、時代が要請する技術の翻訳を様々な試みることで建築の可能性を広げることは、むしろ建築デザインの中核を担うことになるのではないかと考えている。特に、本研究では人間の行動と熱的なシークエンスを加味することで、建築デザインの外皮の解釈が、建築環境学の観点から変わる可能性があると考えている。

## ■研究目的と研究の特色・独創性

建築におけるシークエンスには様々な研究がある。建築の動線や空間配置が利用者の体験にどのような影響を与えるのか、また建築や都市空間における時間の流れを考慮した研究、空間のつながりや意図された視覚的な効果など、建築における感覚的な要素についての研究が多くなされてきた。しかし、いずれも視覚を中心としたものであり、日射や温湿度、気流など、熱的な観点からシークエンスについての研究はなされていない。研究代表者は、科研費（建築環境学）を利用して、従来では難しかった移動を伴った人体の近傍における不均一・非定常な温熱環境を測定するウェアラブルデバイス(図1)を開発した。空気温度・相対湿度・照度・風速センサを備え、位置情報と人間の行動、心理量などを小さな計測器で計測することが可能である。本システムによって人間の行動や心理・生理を加味しながら、我々はあるとき快適・不快と感じるかをライブ状態で計測することで、不均一・非定常な熱的快適性に関する知見を得ることが可能になる。省エネ法の改正などにより建築の外皮性は高まってきたが、人間の行動と熱的なシークエンスを考慮すると、法的な規制による外皮（断熱）ラインとは異なる、もっと豊かな境界面が築けるはずである。本研究は、不均一な温熱環境を伴った建築を、人間の行動と熱的なシークエンスから再解釈することで建築の可能性の幅を広げることを目的としており、建築設計・建築計画・建築環境学・建築情報学という複数の観点から統合的に研究を行う。



図1 ウェアラブルセンサ



図2 清津峡トンネル予備実測結果 気流が人間の心理に影響を与えている可能性がある。

## (2) 実施計画の大綱

本研究では、不均一な温熱環境をもつ建築のシークエンスを中心に、人間の行動と心理量・生理量を加味しながら温熱環境を計測し、従来の指標に則りながら評価を行うことを目的としている。計測対象は現在調整中だが、不均一な環境を伴っている清津峡トンネルは了承済みである。以下の3つの研究項目を進める。

## 1) 2024年4月～7月：ウェアラブルセンシングデバイスの量産

ウェアラブルデバイスおよびスマートフォンをBluetoothで接続することにより、スマートフォンに送られてきた空気温度・相対湿度・照度・風速・放射温度の情報を記録しつつ、スマートフォンに内蔵されているGPS位置情報および代謝量を毎秒記録する。またアプリケーションを操作するタイミングと、アプリケーションで入力した情報（快・不快の強度）についても合わせて記録する。快・不快の申告は1秒間に最大6回程度認識できる仕様とする。ウェアラブルデバイスおよびスマートフォンで取得した情報はCSV形式で書き出すことが可能で、WifiまたはLTE経由でサーバへ送り解析用のデータベースとする。

## 2) 2024年8月～12月：多様な温熱環境を伴った実物件の実測調査

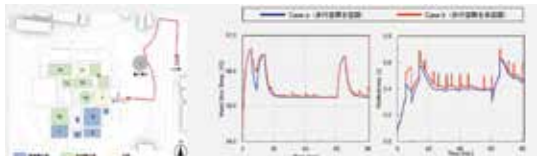
- ・清津峡トンネル（調整済み）(図2)
- ・金沢21世紀美術館（調整中）(図3)

## 3) 2024年10月～：不均一・非定常な熱的快適性の評価

実測結果のまとめを行い、人間の行動ならびに位置情報と時間情報を伴った建築のシークエンスを加味して温熱環境の定量的評価を行う。また、機械学習および数値解析により定式化を行うことで、他物件での検証を可能にするシミュレーションモデルの構築を検討する。



図3 金沢21世紀美術館



空調された展示室（滞在）と非空調の通路（移動）とした場合、人間の行動を加味すると、外皮のシングルガラスの影響は限りなく小さくなると考えられる。

## (3) 研究成果の公表予定

以下の学会・学術誌・建築・美術関係雑誌等を通じ、研究結果を積極的に発信する。

## ◆国内学会発表

日本建築学会大会 2025年4月に投稿（同8～9月に発表）

## ◆査読論文

日本建築学会計画系論文集、日本建築学会技術報告集、International Journal of Japan Architectural Review for Engineering and Design

## ◆国際学会発表・国際学術誌

ISIAQ(International Society of Indoor Air Quality and Climate)

にぜひ投稿したいと考えている。

## 芦澤 竜一

Ryuichi Ashizawa

滋賀県立大学 環境科学部 環境建築デザイン学科  
教授

専攻分野／環境建築学

## ●研究課題

本研究では、衰退の危機に瀕している琵琶湖に浮かぶ有人島である沖島町を対象として、町並みや暮らし、文化や信仰をアーカイブすることで、今後持続的に集落を維持していく上で必要な条件を明らかにし、それらを「沖島住民憲章」という形で広く発信することで、まちづくり活動の促進、引いては沖島町伝統的民家や漁村の町並みの保存を推進することを目的としています。

本研究の意義は、世界的にも非常に希少な湖に浮かぶ有人島における暮らしの保存と少子高齢化によって信仰、文化、生業の面で担い手が不足している沖島町を廃村の危機から救うことにあります。また土地所有等に関しては明確な手続きなしで受け渡し等が行われていた沖島町において、空き家、農地、森、海、湖などの地域資源管理・所有の問題を本研究で作成、実践する「沖島住民憲章」が解決の一因となることを想定しています。また集落に新たに参入する人や団体に対して、一定のルールを設けることで、既存の沖島の魅力を上書きする経済活動に対して抑止力になると考えています。

## ■主題

沖島町伝統的民家と町並みの保存に関する研究  
- まちづくり活動における意識統一を目的とした  
「沖島住民憲章」の作成と実践に着目して -

## ■研究計画の概要

## (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

## (1)-1 研究の目的と意義

近年、日本中の離島地域における人口の過疎化・高齢化の進行は、地域における集落機能や社会活動の低下を招いています。特に存続が危ぶまれるような限界集落については、集落機能の著しい低下や、空き家、農地、森、海、湖などの地域資源管理・所有の問題が深刻化しています。本研究対象地域である、琵琶湖に浮かぶ有人島である沖島町でも同様に、土地所有等に関しては明確な手続きなしで受け渡し等が行われていたため同様の問題を抱えており、今や島の平均年齢は65歳以上の高齢社会です。

これまで申請者は、2020年度より、滋賀県近江八幡市沖島町を対象として、島内の空き家の利活用促進を図るため、島内空き家と集落の基礎的な実態調査を行ってきました。実態調査としては、島内の全ての空き家所有者に対してアンケートを実施し、実測許可を得た空き家を対象に平面図や断面図等の実測、劣化箇所の記録、集落構造の調査を行いました。そこで本研究では、衰退の危機に瀕している琵琶湖に浮かぶ有人島である沖島町を対象として、町並みや暮らし、文化や信仰をアーカイブすることで、今後持続的に集落を維持していく上で必要な条件を明らかにし、それらを「沖島住民憲章」という形で広く発信することで、まちづくり活動の促進、引いては沖島町伝統的民家や町並みの保存を推進することが目的です。さらに離島という環境での島内のつながりが濃い反面、土地所有等に関する問題によって、増加中の空き家の利活用に対して非常に手を入れにくい状態になっている沖島町の人々を「沖島住民憲章」によってまちづくり活動の意識を統一するきっかけになると考えています。沖島における所有問題の改善は日本唯一の淡水湖に浮かぶ有人島という環境、文化等の保存や島の再活性に向けて大きな前進です。また島内にある資源を活用した沖島町ならではの暮らしや建築のデザインを探ることは、日本やアジア地域にある離島集落のまちづくりのモデルケースとなると考えており、本研究の遂行は対象地域の沖島町以外の離島にも波及するサステナブルデザインに関する研究であることに意義があると考えます。

## (2)-2 その特色とする独創性

本研究では、沖島の伝統的民家や町並みの保存を各対象物件において行っていくのではなく、沖島町文化や信仰をアーカイブすることで明らかになった沖島のコスモロジーや先人の英知を参考に、今後持続的に集落を維持していく上で必要な条件を整理し、それらを「沖島住民憲章」という形で広く発信することにおいて独自性の高い実践的な研究だと考えます。さらに沖島町の集落の存続と生業や文化の継承のあり方を再考し、未来に繋げるサステナブルな暮らしを構築するための、持続可能なマスタープランの計画・提案への展開を想定しており、において研究手法の独自性があると考えます。

## (2) 実施計画の大綱

## ①研究計画

本研究では、まちづくり活動における意識統一を目的とした「沖島住民憲章」の作成と実践に関する研究、その憲章を活かした沖島町マスタープランの作成を目指す実践活動の二項目で進めていきます。

2024年度のスケジュールは、以下を予定します。

4月～5月：他集落へのフィールド調査・取材

6月～7月：沖島町の町並みや暮らし、文化や信仰のアーカイブ

8月～9月：「沖島住民憲章」の作成、ワークショップの開催

10月～12月：沖島町の持続可能な暮らしを構築するためのマスタープランの作成

2月～3月：研究成果報告・書作成、日本建築学会大会論文の準備

これまでの調査から沖島町は、良好な漁場に接する敷地に構成されており、その場所に漁業を主たる生業とする住民のための住宅が高密度に密集した集住形態を成していることが分かっていきます。沖島町内の集落は今もなお漁業を生業として成立しており、文化や風習が形を変えながらまだに残る伝統的な漁村集落でした。そのような漁村集落は一つの共同体的性格が保持されているため、高密度集住環境が成り立っているが、一方で生活及び生業の維持・継承のために、共同体的性格の保持を余儀なくされているとも捉えられます。そうした漁村集落として社会に適応した空間を存続させるには、漁村社会に適応した空間でなければなりません。そうでなければ、共同体的性格は失われ、それと同時に良好な漁場の維持管理や高密度居住環境の維持が困難といえると考えます。そのため沖島町において未来に繋げるサステナブルな暮らしを構築するためには、伝統的民家として保存していくだけでなく、集落の存続と生業や文化の継承のあり方を同時に考えなければならないことが明らかになりました。

そこで本研究では、まず4月～5月にかけて日本における沖島町のような漁業集落へのフィールド調査・取材を行い、漁村集落における共通の課題や集落ならではの課題をまとめます。まとめた結果は沖島のまちづくり活動の参考資料として整理します。6月～7月には改めて沖島町を調査し、沖島のコスモロジーや先人の英知を参考に、今後持続的に集落を維持していく上で必要な条件を整理します。それらを踏まえて、8月～9月は沖島町における共同体的性格を維持する要因になっていることを条件としてリストアップし、「沖島住民憲章」という形で村人だけでなく外部の人に対しても情報を発信するワークショップを開催します。さらに作成した「沖島住民憲章」を基に沖島における土地関係(住居空間や公共空間、空き家の分布)から町並みの分析や再考を行います。分析結果から沖島町の集落の存続と生業や文化の継承のあり方を再考し未来に繋げるサステナブルな暮らしを構築するための、持続可能なマスタープランの計画・提案を行います。

## ②研究体制

調査研究については、申請者の芦澤竜一を代表者とし、滋賀県立大学の芦澤研究室からなるメンバーが担当します。芦澤はこれまでに琵琶湖に浮かぶ有人島である沖島を対象とした「沖島町伝統的民家の保存に関する基礎調査」、「流木ハット流木を構造物とした建築生成モデルの研究」の研究を行ってきた実績があります。

## (3) 研究成果の公表予定

本研究の成果は、2024年-2025年の日本建築学会での口頭発表、学術ジャーナルへの投稿（JIA他）、国際会議プロシーディングへの投稿等により、各建築メディア雑誌等に随時公表を行う。

また、研究者が主催するホームページへの掲載や研究室によるホームページ・SNS等の媒体によって、広く研究成果を発表する。

また調査研究の一環でまとめた内容を沖島町や近江八幡市に共有し、今後の地域活性の計画づくりに役立てるようにする。

さらに「地域計画」（日本まちづくり協会）、他、建築分野に留まらない、開かれたメディアにて発表を行う。



## 佐々木 優二

Yuji Sasaki

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構  
建築研究本部 北方建築総合研究所 研究職員  
専攻分野／建築環境学

### ●共同研究者

圓山 彬雄  
株式会社アープ建築研究所 代表取締役  
齊藤 雅也  
札幌市立大学デザイン学部 教授  
西川 忠  
札幌市立大学デザイン学部 教授  
小倉 寛征  
株式会社エスエーデザインオフィス一級建築士  
事務所

### ●研究課題

2重積みコンクリートブロック造住宅（以下、2重積みCB住宅とする）は、北海道の歴史を踏まえて開発された住宅・構法であり、北海道独自の住宅文化の1つである。そのため2重積みCB住宅の設計者がいなくなったり、既存ストックが解体されたりする前に、2重積みCB住宅の持つポテンシャルを再考することが必要と考えられる。そこで本研究では、①設計・②環境・③住みこなしの主に3つの視点から2重積みCB住宅のポテンシャルを顕在化し、現代住宅への実装方法を見出すことを目的とする。具体的には、設計者への聞き取り調査、温熱環境実測、居住者アンケートを行ない、ポテンシャルを顕在化する。これらを踏まえて、現代にも応用できる考え方や技術を抽出し、それらを現代住宅に実装するための方法を検討する。2重積みCB住宅の持つポテンシャルを現代住宅に実装することができれば、2重積みCB住宅の持つ価値が今後も継承されることになる。このことは、北海道が形成してきた独自の住宅文化の継承でもあり、大きな意義がある。

### ■主題

## 北海道における2重積みコンクリートブロック造住宅のポテンシャル顕在化と現代住宅への実装

### ■研究計画の概要

#### (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

##### ●研究の目的

1953年に北海道防寒住宅建設等促進法が制定されたことを契機に、北海道の住宅は独自の発展を遂げてきた。具体的には、この法律の施行によって、コンクリートブロックを主要構造としたコンクリートブロック造住宅（以下、CB住宅とする）が北海道で開発された。CB住宅は気密性や耐火性に優れていたこともあり、1950年代後半から1970年代まで大量に供給された。共同研究者である圓山は、CB住宅に外断熱を施して、さらに外装仕上げ材としてコンクリートブロックを積む「2重積みCB住宅」を開発し、これまで数多くの設計を行なってきた。しかし、建設費が木造よりも高いことや施工できる大工の不足、2重積みCB住宅の設計者が高齢化していることなどの理由から、CB住宅・2重積みCB住宅の着工戸数は急減している。2重積みCB住宅は、北海道におけるCB住宅の開発・普及の歴史を経て開発された住宅・構法であり、北海道独自の住宅文化の1つと考えられる。また、エネルギー消費量が同時期に建設された木造住宅よりも少ないことや、構造面の工法などが整理されており（既往研究1、2）、現代住宅にも適用できる考え方や技術を有している可能性が考えられる。そのため、2重積みCB住宅の設計者がいなくなったり、既存ストックが解体されたりする前に、2重積みCB住宅の持つポテンシャルを再考することが必要と考えられる。しかし、2重積みCB住宅のポテンシャルを顕在化し、現代住宅に応用可能な考え方や技術の抽出は行なわれていない。そこで本研究では、①設計・②環境・③住みこなしの主に3つの視点から2重積みCB住宅のポテンシャルを顕在化し、現代住宅に応用できる考え方や技術を抽出したうえで、それらを現代住宅に実装するための方法を見出すことを目的とする。

##### ●研究の意義

2重積みCB住宅を設計・施工できる技術者が減少している現在において、今後さらなる供給促進を考えることは困難と考えられる。しかし北海道の住宅文化を形成した2重積みCB住宅の持つ考え方や技術を抽出し、それらを現代住宅に実装することができれば、2重積みCB住宅の持つポテンシャルが今後も継承されることになると考えられる。このことは、北海道が形成してきた独自の住宅文化の継承でもあり、大きな意義があると考えられる。

##### ●研究の特色とする独創性

意匠面では十分な評価がされていたものの、研究蓄積がほとんどない2重積みCB住宅を対象に、その①設計・②環境・③住みこなしといった多面的な視点から価値を再考することは、研究として独創性を有すると考えられる。

#### (2) 実施計画の大綱

本研究の目的を達成するため、以下の4つの調査を行なう。

##### 研究項目1 2重積みCB住宅の設計方法に関する調査（担当：圓山・小倉・西川・佐々木）

（調査内容）

共同研究者である圓山を含め、北海道で2重積みCB住宅の設計実績を有する設計者への聞き取り調査と既往研究レビューを行なう。また最近の戸建住宅との比較を行ない、2重積みCB住宅の設計上の特徴や課題を把握する。このとき、構造や材料に関する設計者の意見も併せて抽出する。

（スケジュール）

2024年4月～2024年10月末までに実施する。

##### 研究項目2 2重積みCB住宅の温熱環境調査（担当：齊藤・佐々木）【着手中】

（調査内容）

2重積みCB住宅を対象に、夏期・冬期における室内の温熱環境実測とエネルギー消費量を調査し、その実態を把握する。また木造戸建住宅との違いについて、既往研究等と比較し分析をする。

（スケジュール）

2023年7月～2025年2月末まで実施する。

なお、本研究助成に先駆け、夏期（2023年7月）、冬期（2023年12月）の実測調査を始めている。

##### 研究項目3 2重積みCB住宅の「住みこなし」の実態調査（担当：佐々木・齊藤）【着手中】

（調査内容）

2重積みCB住宅における居住者の「住みこなし」について、その実態を明らかにする。特に、2重積みCB住宅ならではの「住みこなし」があるかを、既往研究との比較によって明らかにする。

（スケジュール）

2023年12月～2025年2月末まで実施する。

なお、本研究助成に先駆け、冬期（2023年12月）の実測調査を始めている。

##### 研究項目4 2重積みCB住宅のポテンシャルの顕在化と実装方法の検討（担当：全員）

（調査内容）

研究項目1～3で得られた結果から、2重積みCB住宅が持つポテンシャルを顕在化し、現代住宅に応用できる考え方や技術を抽出する。またそれらを現代住宅に実装するための方法を検討する。

（スケジュール）

2024年10月～2025年3月末まで実施する。

#### (3) 研究成果の公表予定

- ・2025年 日本建築学会大会（口頭発表）
- ・2025年 日本建築学会北海道支部（口頭発表）
- ・2025年 Japan Architectural Review (Impact Factor付きの査読論文、予定)
- ・日本建築家協会北海道支部でのセミナー（予定）

## 秋田 亮平

Ryouhei Akita

東京藝術大学 芸術情報センター 特任講師  
専攻分野／建築設計

### ●共同研究者

金田 充弘  
東京藝術大学 美術学部 建築科 教授

### ●研究課題

本研究は海水由来の固化材であるマグネシアセメントと土による硬化体を再考し、ポルトランドセメントに変わる自然の素材の極薄シェル構造の探求を目指すものである。

マグネシアセメントは酸化マグネシウムと塩化マグネシウムと水とが反応することでポルトランドセメントと同様の硬化反応を起こす現象の総称である。にがり（塩化マグネシウム）と石灰と土による三和土に近い構法だが、マグネシアセメントはポルトランドセメントに近い強度を獲得することができる。吸水性が高いなどの短所はあるものの、有機物との接着性が良い特徴があるため、土を粗骨材、植物繊維を補強材とした硬化体を作ることが期待される。また、長時間の炭酸化の過程を経て、自然に還っていく性質があると言われていることから、自然に還る構造物も期待される。マグネシアセメントによる構法のさらなる探求と造形の可能性を模索することで、環境負荷も配慮したシェル構造の実現を目指す。

### ■主題

## 土と海水由来のマグネシウムによる極薄シェルの構法と造形の研究

### ■研究計画の概要

#### (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

本研究は、ポルトランドセメントに代わる固化材としてマグネシアセメントに注目し、構法のさらなる探求と造形の可能性を模索することで、土と海水由来の硬化体による極薄シェル構造の可能性を探求するものである。

マグネシアセメントは、酸化マグネシウムと塩化マグネシウムと水とが反応することで、ポルトランドセメントと同様の硬化反応をおこす現象の総称である。その歴史は古く、1800年代後半にフランスで発見され戦後までは日本でも建材としての事例や研究文献が見られ、以前はJISにも記載があったが1998年にその使命を終えたということで規格は廃止となった。その理由としては、吸水性が高いことや金属を腐食させるなどのデメリットから、殆ど使われることがなくなったことがあげられる。しかしながら、長所としては有機物との接着性が良いことやポルトランドセメントに比較して同じ比重なら強度が高いとされている。また、マグネシウムセメントは硬化物でありながら、長時間の炭酸化の過程を経て、安全に自然に還っていく性質や、マグネシウムを含む廃棄物は肥料としても用いることが可能と言われていることから、自然に還る構造体として昨今の環境問題へのアプローチから非常に研究意義のある素材であると考えられる。

材料となる酸化マグネシウムと塩化マグネシウムは海水由来の成分であり、マグネシウムは地球上に豊富に存在する元素で安全性も高い成分である。酸化マグネシウムは、海水と石灰との反応によって生成した水酸化マグネシウムを精製・濃縮し、脱水、仮焼したもので、塩化マグネシウムはにがりの主成分でもあり、海水から食塩を結晶化させた時に残った液体である。塩化マグネシウム（にがり）は、古来から消石灰と水と土による三和土で利用されている。

先行研究および事例では、酸化マグネシウムによる非焼成土ブロックの組積造の研究および小規模住宅での実用化があるが、土由来の構法の多くは、版築やブロックによる組積造など、厚く重い構造になってしまうことが多い。一方、我々の研究の独創性としては、薄肉の構造体を目指すことにある。そこで注目しているのは、吹付けコンクリートの要領で、布にマグネシアセメントを吹き付ける構法である。有機性素材との接着性が良いことから、自然繊維の布を型枠兼補強材として利用することで、型枠を極力減らすことも可能であると考えている。現時点でフレームに固定した布にマグネシアセメントを吹き付ける実験は成功している。

マグネシアセメントは、申請者らによる令和5年度の研究課題である「工芸的手法を用いた積層繊維補強セメント系極薄シェルによる空間構造の研究」の素材探求において発見し、その実践において、竹繊維を混ぜた左官によるシェル構造を実現している。年度内にはフルスケールの薄肉シェル架構のモックアップの制作を予定している。

本研究は自然由来の素材研究という側面のみならず、構法とその造形のさらなる探求を通して、マグネシアセメントの可能性と有用性を提示することを目指すものである。

#### (2) 実施計画の大綱

本研究は東京藝術大学での構造材料演習の授業と連動しながら、定性的・定量的な検証を重ねるとともに、人が数人立ったかたちで入れるスケールのシェルの実現を目指す。

##### ○具体的な課題

##### ①土の種類による影響

先行研究では、骨材に当たる土は真砂土と呼ばれる風化した花崗岩による土を用いて実験を行っている。通常の砂でも試したところ、強度は出るもののマグネシウムが分離してしまう現象が見られた。他の産地の土も試すことで、マグネシウムセメントと土の関係性を考察する。

##### ②土と塩化マグネシウム、酸化マグネシウムの配合比率

土5、塩化マグネシウム1、酸化マグネシウム1を基準とした時に、土の比率を小さくするほど、強度が増すことが実験結果から推察されている。より多くの実験を通して、定量的な評価の水準を高めることで、マグネシアセメントの物性の評価を行う。

##### ③マグネシアセメントと補強材

マグネシアセメントは低アルカリ性であるものの、おそらく塩化マグネシウムを混和することから吸水性が高く金属を腐食させてしまう。対策として防錆などの処理をした場合の影響等を検証する。また、有機物とは接着性が良いことから、竹などの木材や麻布による補強の可能性を探求する。

##### ④デジタルツールを用いた造形の可能性

前年度の研究では、Rhino+Grasshopperを用いて、形状の探求から型枠の設計および展開図の作成までを一貫して行った。本研究においても、デジタルツールを使うことにより、最終形状の探求だけでなく、さまざまな条件でのバリエーションの可能性を探求する。

##### ⑤繊維補強による工法の評価

現時点で想定している吹付けによる工法では、素材の粒度、流動性および、コンプレッサーの出力や器具の吹出口の径など、さまざまな要因が絡み合う。本研究では、布を固めることを想定していることから、そのベストプラクティスを模索する。

##### ⑥マグネシウムセメントの自然への影響

文献では炭酸化の過程を経て、自然に還っていくと言われているが、実際に暴露試験や土と混ぜ合わせ植物を育てることで、自然への影響を観察する。

#### (3) 研究成果の公表予定

本研究の成果物であるフルスケールのシェルの制作は、東京藝術大学取手校地での実現を想定している。

成果の様子は、現地見学会などの企画を検討するとともに、東京藝術大学美術学部建築科のホームページへの掲載やSNSなどでも発信していく。

研究結果は報告書としてまとめ、学会及び雑誌での発表を目指すとともに、写真などをアーカイブしていくことで、ポートフォリオとしてもまとめていく。

また、デザインプラットフォームサイトなどへの掲載も目指す。

## 「海のコモンズ」| 沿岸部における共有空間の利用形態と造形から考案する事前復興計画

## 下田 元毅

Motoki Shimoda

大手前大学 建築・芸術学部 講師  
専攻分野／建築・都市計画

## ●研究課題

本研究は、沿岸部における地域固有の「共有空間」（路地・水場・広場）の調査にもとづき、来るべき東南海沖地震に向けた「事前の復興計画」を地域毎に提案・実践（協同利用）を行うものである。地域固有のコミュニティのプリミティブな場所・空間としての「共有空間」に着目し、その利用と造形の在り方を津波被害が想定される、紀伊半島沿岸部、四国南・東・西沿岸部の175集落の共有空間調査・研究を行う。それにもとづき、「事前復興計画」の計画策定と選定した3集落において地域と協同した空間利用の実践を行うことを目的とする。

沿岸地域の地縁・血縁と地域文脈の中で利用されてきた固有の共有空間である「海のコモンズ」（形態、素材、日常利用方法、維持管理の仕組み、コミュニティの範囲等）をつぶさに把握することで、非常時における防災的な役割としての空間利用に加え、日常のコミュニティの場としての側面に着目し、今日的利用の在り方の創出を契機とした、日常利用と維持管理の仕組みを事前の備えとしての地域コミュニティ再構築に向けた起点としたい。

## ■研究計画の概要

## (1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

本研究は沿岸部における地域固有の共有空間（路地・水場・広場）の調査にもとづき、来るべき東南海沖地震に向けた「事前の復興計画」を地域毎に提案・実践（協同利用）を行うものである。地域固有のコミュニティのプリミティブな場所・空間としての「共有空間」に着目し、その利用と造形の在り方を津波被害が想定される、紀伊半島沿岸部、四国南・東・西沿岸部の175集落の共有空間調査・研究を行う。それにもとづき「事前復興計画」の計画策定と選定した3集落において地域と協同した空間利用の実践を行うことを目的とする。本研究における「共有空間」の調査・研究は、地域住民、行政、専門家と連携し、実践を伴った「事前復興計画」であることに意義を有するものと位置付けている。

来るべき東南海地震による大震災への備えが求められている。「南海トラフ地震防災対策推進基本計画（内閣府:2021年5月更新版）」に目を向けてみると、公共施設・居住域における高台移転などの事前復興計画・対策のほとんどは市街地が想定されており、沿岸部の小規模な集落に向けた具体的な言及はない。多くの水産業に従事した沿岸部においては、住民の大部分は主に漁業と水産業に従事している。水産業は、食品の保冷、加工、流通のネットワークと結びついており、地域社会・経済構造の連携、すなわち沿岸部の小規模な集落と市街地が連動した構成をしている。そのため、市街地と並行した「事前」を備えておくことが重要となる。また、沿岸部の多くの小規模集落には限られた土地利用の中で、まとまった利用のできる土地が存在しない場合が多い。そこで、地域固有の日常的に利用されてきた共有空間に着目した。沿岸地域の地縁・血縁と地域文脈の中で利用されてきた固有の共有空間である「海のコモンズ」は、地域における従来からの共同利用されてきた経緯があることから、有事の際にも有用な利用ができる潜在性があり、一次避難場所や被災時における利用形態を思案しておけると考える。

上記を踏まえ、津波被害が想定される、既述の対象エリアにおける「既存の共有空間」の調査を行い、そこに見られる「利用の造形」（形態、素材、日常利用方法、維持管理の仕組み、コミュニティの範囲等）をつぶさに調査、把握する。ここで得られた知見にもとづき、現在、事前復興計画に向けて準備を進めている三重県尾鷲市九鬼町と調査で選定した2集落において、復興の起点としての「共有空間」の日常利用と維持管理の仕組みを通して地域コミュニティの再構築、災害時における水や避難等の確保を担保するための「事前復興計画と実践」を行う。非常時における防災的な役割としての空間利用に加え、日常のコミュニティの場としての側面に着目し、今日的利用の在り方の創出を契機とした、日常利用と維持管理の仕組みを事前の備えとしての地域コミュニティ再構築に向けた起点としたい。

※本研究の成果物：①事前復興計画の策定（地域マスタープラン）3集落、②3集落における「共有空間」利用の実践、③共有空間の魅力を広く公開するための展覧会、④論文発表、⑤調査結果にもとづく提言書

## (2) 実施計画の大綱

## ■実施スケジュール

- 2024年 5-7月：175集落調査（四国沿岸部・紀伊半島沿岸部）
- 2024年 8月：対象集落の選定（アドバイザーに大阪大学大学院 木多道宏教授を召集）
- 2024年 9月：「海のコモンズ会議①（研究会）」開催（調査中間報告）
- 2024年 11月：対象地域における再調査と実施準備
- 2024年 12月：「海のコモンズ会議②（シンポジウム）」開催（報告会）
- 2025年 1-2月：「事前復興計画策定・実践（共有地利用ワークショップ）」の開催
- 2025年 3月：展覧会「海のコモンズ提言」※提言書の公開

## ※事前準備

- 2024年 3月：「空き地利用アイデアワークショップ」@三重県尾鷲市九鬼町

申請者の研究室が主催する空き地利用の把握と利用方法を目的としたワークショップを開催（決定）。本申請における事前の研究準備と実装のための基礎調査と位置付けている

## ■研究体制

「共有空間」の調査対象地は、紀伊半島沿岸部、四国沿岸部の津波浸水被害が想定される175集落を対象とする。集落内に存在する全ての「共有地」の①位置②形態③利用と管理の仕組み④共有地を中心としたコミュニティの範囲の把握を行う。対象集落数が広域、且つ、多数にわたるため、研究室の学生、大学院生及び日本建築学会 農村計画委員会 減災集落小委員会と日本建築学会近畿支部農村計画部会（申請者は部会長）の構成員と連携して調査を行う事とする。「海のコモンズ会議」では、調査における共有地の様々な利用方法や維持管理の仕組みなどの報告を行いながら、地域の既存コミュニティに対しての再編の糸口としたい。また、共有地の実践に参加する地域住民、行政関係者と戸戸完成後の維持管理、運営体制を構築していくための地域組織づくりに向けた体制を整える。

## ■主な調査項目

- ・空間 | 寸法、素材、利用方法、利用頻度、利用範囲のコミュニティ
  - ・管理 | 共有地の維持管理のルールや監修の把握、所有と登記の変遷、管理主体組織の把握
  - ・組織 | 地域組織の役割、空間の相互扶助体制、自治会、老人会、婦人会、青年会などの役割、権限、歴史
- 上記に関わる平面図、断面図、領域変遷図、維持・管理形態図を作成する

## (3) 研究成果の公表予定

【国土交通省国度政策局／農林水産省漁港漁場整備部】への提言及びデータ提供】

調査で得た漁村及び漁港施設の利活用の現状や情報と知見を整理し、上記政策局へ向けた提言を行う。提言内容は、従来からのコミュニティで成立している海際におけるコモンズ空間に加え、今後の未利用地における日常利用及び利活用方法と、コミュニティの側面からの防災的な役割に関する内容を想定している。

【展覧会「海のコモンズ」の開催】

調査研究報告を広く一般の方にも公表する手段として、海際の様々な空間・造形的な側面に焦点をあてた内容の展覧会を催す。主に写真（※添付資料参照）や図面や模型を用いた展示内容とし、各調査対象地のギャラリー等での開催を予定している。

【書籍出版「海のコモンズ」】

展覧会での内容を整理し、「海のコモンズ」の出版を予定している。（彰国社、学芸出版を予定）

【シンポジウムの開催】

中間報告を兼ねた「シンポジウム 海のコモンズ会議2024」を実施する。研究者や建築家をゲストに迎え、調査内容の豊富化を図る。

【論文の投稿】

調査・研究内容を学術的に整理し、日本建築学会への論文投稿及び研究発表を行う。



## 川北 裕子

Yuko Kawakita

パナソニック汐留美術館 学芸員  
専攻分野／工芸・デザイン

### ●活動の趣旨

パナソニック汐留美術館では、社業との関わりの深い「工芸・デザイン」分野に関する企画展を毎年計画し、実施しています。「工芸・デザイン」に対する理解を深める展覧会を実施することで、今日までの生活文化を形成してきた美意識や価値観などの真髓を伝え、来場者がより一層豊かな生活を育むことができるような機会を創出することを目的としています。その活動の一環で、今回は20世紀デンマークを代表する家具デザイナー、ポール・ケアホルムの生涯と仕事、またデザインに関わる哲学を紹介する企画展を実施します。日本の美術館では初めて大きくとりあげるデザイナーに焦点を当てることで、特にデザイン分野における知見が深まるような展示や関連プログラムの実現を目指して計画を推進しています。

### ●実施時期

展覧会:2024年6月29日(土)～9月16日(月・祝)  
(会期66日間)

実施場所:パナソニック汐留美術館(東京都港区東新橋1-5-1-4F)

実施時間(開館時間):午前10時～午後6時(夜間開館日あり、午後8時まで)

講演会:会期中2回実施予定(6月29日(土)、30日(日)、9月14日(土)、15日(日)のいずれか)

### ■主題

## 「織田コレクション 北欧モダンデザインの名匠 ポール・ケアホルム展 時代を超えたミニマリズム」

### ■計画の概要

このたびパナソニック汐留美術館では、20世紀を生きたデンマークの家具デザイナー、ポール・ケアホルム(1929～1980)の仕事に光を当てた展覧会を開催します。

デンマークのオスターヴロに生まれたケアホルムは、15歳で家具職人の徒弟として働き始め、19歳でマイスターの資格を取得しました。ハンス・J・ウェグナーの事務所勤務を経て、コペンハーゲン美術工芸学校でデザインを学びます。卒業後はデザイナーとして出発し、30年弱の活動期間の中で今日まで製品化され続ける名作を生み出していました。1957年と60年にはミラノ・トリエンナーレでグランプリを受賞するなど高く評価され、デンマークの王立芸術アカデミーでは教鞭を執り、最後は学長を務めました。

ミッドセンチュリーのデンマークの家具デザインといえば、一般には木工の温もりあるデザインを思い浮かべがちですが、ケアホルムの仕事の特徴は、石や金属などの硬質な素材を取り合わせた厳格なデザインにあります。それでいて決して冷たい印象は与えず、有機的な機能性を備えています。19歳でマイスターとなった背景もあり、ケアホルムは木材の持つ温かみや柔らかさを深く理解しながら異素材のデザインに生かすことができたデザイナーです。また、ミース・ファン・デル・ローエらの外国の家具も研究し、先達の優れた仕事の「リデザイン」を実践していました。

ミニマルな造形を目指すことで豊かなデザインを体現したケアホルムの仕事は、日本建築の美学とも響き合い、現在もなお、国内にも根強い愛好家がいるデザイナーです。本展覧会では、国内屈指の椅子研究家/収集家として活動する東海大学名誉教授の織田憲嗣氏の監修とコレクションにより、ケアホルムと周辺の影響関係を紹介する、日本の美術館では初めての展覧会となります。代表作である椅子・家具約40点とともに、図面や関連資料などをあわせて展覧します。

本展覧会に関連し、本展監修で北海道在住の織田憲嗣氏と、デンマークのデザインミュージアムからアンヌ・ルイズ・ソマー(Anne-Louise Sommer)館長を招聘した講演会を計画しています。織田氏には、今日までの織田コレクションの形成、その中でも特に今なぜポール・ケアホルムに注目するのかといった点や、デザインによる地域振興を目指して、北海道東川町文化芸術コーディネーターとしてどのように活動しているかなどをお話しいだきます。またソマー氏には、デンマーク家具デザイン史におけるケアホルムの位置づけについて本国の専門家の立場からお話ししていただきます。両者の講演を通じて、ケアホルムのデザインへの理解を深めるとともに、本展覧会の副題にも掲げた「時代を超えたミニマリズム」とは何かを考える機会を提供します。講演会会場は、パナソニック東京汐留ビル5階ホールを想定しており、各回1～時間程度の講演、150名程度の参加者数を見込んでいます。

### ■その他特記すべき事項

本展覧会では、フランスを拠点に活動する建築家・田根剛氏(ATTA)による会場構成を予定しています。田根氏には、下記の展示校正のもと、ケアホルムと織田氏のデザイン哲学が視覚的に交差するような空間を設計していただきます。

1. LIFE&ORIGIN: ポール・ケアホルムのデザイナーとしての原点、リデザインについて
2. STRUCTURE&SPACE: ポール・ケアホルムのデザイン哲学(素材との対話、幾何学性、ディテールへのこだわり、ヴァリエーション、建築との関わり(特にケアホルム邸とグンロクソン邸を中心に)、写真家との協働、パブリックスペースへの展開)
3. DETAIL&INSPIRATION: ケアホルムの家具のディテールをみせる映像や織田氏によるナレーション、スライド写真を展示するとともに、来場者が実際に座って体験できるケアホルムの椅子を設置
4. ARCHIVE&EXPERIENCE: 「愛され続ける名作」と題して、美術館・商業施設・個人邸など、特に日本国内におけるケアホルム作品の導入事例を写真パネルで紹介。デザインで地域振興を続ける北海道東川町の取り組みにも焦点。



## 柳沢 究

Kiwamu Yanagisawa

京都大学大学院工学研究科・准教授  
住経験研究会・代表  
専攻分野／建築計画・建築設計

## ●活動の趣旨

建築学生がその両親・祖父母にこれまで暮らしてきた住居について聞き書きを行う「住経験インタビュー」は、約100年前から現代にいたる多様な住まいとそこでの生活の変化を問取り図とともに描く営みであり、ある国における文化や価値観・考え方などを理解するために極めて優れたコンテンツとなる。本活動では、これまでに実施した国際的な住経験インタビューの成果（日本で学ぶ留学生や、オランダやスロベニアの大学生によるものなど。参加者の国籍は10数カ国に及ぶ）の展示を通じて異文化理解および住宅デザインのためのツールとしての住経験インタビューの可能性を発信するとともに、招聘研究者によるセミナーやワークショップを開催しさらなる国際的展開の第一歩とすることを目的とする。

## ●実施時期

●展示会…時期:11月頃に会期2週間程度／場所:大阪近郊(近畿大学または大阪工業大学を予定)／回数:1回  
●セミナー…時期・時間:展示会会期中に5時間程度／場所:同上／回数:1回  
●ワークショップ…時期・時間:展示会会期中に6時間程度／場所:同上／回数:1回

## ■主題

## 世界にひろがる住経験インタビュー

## Home Life Diaries in Japan:

住経験から浮かび上がる世界の多様な住まいと暮らしを通じた異文化交流と新たな住宅デザインの展開(仮)

## ■計画の概要

申請者が独自に考案した「住経験インタビュー」は、住まいと生活に関する経験(住経験)の事例収集を行いながら、人間居住の多様性への理解を深め、住宅計画上の課題を発見し、新たな住まいのデザインの可能性を探るためのメソッドであり、同時に研究・教育・啓蒙プログラムである。今回の活動では、2013～23年に日本7大学・高専と海外2大学で実施した住経験インタビューの成果物(約500点)を元に、異文化理解と国際交流の観点からその成果を発信する展示会・セミナー・ワークショップを開催し、さらなる国際的な展開と交流の基盤を築く。招聘研究者を始めとする参加者が、住経験インタビューの魅力と可能性を理解し、母国や勤務先に持ち帰り、あるいは自身の活動の一環として、将来的に住経験インタビューを実施し、その環を拡げてもらうことが、本活動の大きな眼目である。

## ●展示会「The Unexplored Realities of Dwelling(住まいの知られざる実態)」

2020年のデルフトでの展示ポスター(21点)および、これまでの住経験インタビューの成果物から以下の特徴的事例を選び抜き、計50点程度をポスターとして展示、住経験インタビューによって見ることでできる世界の多様な住まいと暮らしを紹介する。

- ・現代および過去の日本における特徴的住まい・暮らしの事例
- ・日本で学ぶ留学生の母国における住まい・暮らしの事例
- ・南東ヨーロッパ諸国の住まいと暮らしの事例(2021～22年のリュブリャナ大での成果物)

## ●セミナーおよび学生ワークショップ「住経験を通じた異文化理解と住宅デザインへの展開可能性」

展示会会期中に各1回実施する。セミナーでは国内研究者による基調講演「住経験インタビューのすすめ」と、海外からの招聘研究者による住経験を介した異文化理解と住文化の継承・新たな住宅デザインへの応用に関する連続レクチャーを実施。学生ワークショップでは、招へい研究者によるレクチャーとあわせ、2023～24年に住経験インタビューに取り組む学生・留学生による発表(15名程度)とディスカッションを行う。

●海外からの招聘研究者(予定):ルチカ・モミルスキ氏(リュブリャナ大学教授、スロベニア)／ガウラブ・マハバトラ氏(北海道大学客員研究員、インド)／韓勝旭氏(釜山発展研究院、韓国)／モハン・バント氏(クウォバ工科大学教授、ネパール)またはイジョウ氏(内蒙古民族大学講師、中国)

●参加者見込数:展示会は延べ500人程度の来場、セミナーとワークショップは各50名程度の参加を想定する。

●参加予定国:日本、韓国、中国、ネパール、インド、スロベニア、クロアチアなど

●実施体制:申請者が代表を務める住経験研究会(6名)が実施主体となる。メンバーはいずれも大学等の教員であり、会場は大学施設を使用できる。運営・展示作業には学生アルバイトの補助を受けて行う体制をつくる。

全体統括:柳沢究(申請者)／展示:山本麻子(建築家・アルファヴィル)・池尻隆史(近畿大講師)／セミナー:水島あかね(明石工業高専教授)・野村理恵(北海道大准教授)／ワークショップ:笠井賢紀(慶應義塾大准教授)

## ■その他特記すべき事項

「住経験インタビュー」は2013年に、建物だけでなく生活の様相をきめ細かく観察・描写する西山卯三や鈴木成文などの日本の住居学の厚い伝統の上に構想され、以来、建築学生向けの教育・研究プログラムとして、10年にわたる実践経験がある。これまでに数多くの学術的成果を発表するとともに、2019年にはNPO法人西山卯三記念すまいまちづくり文庫の助成を受け、書籍『住経験インタビューのすすめ』を出版した。2020年には、日本生活学会からの支援を受け、デルフト工科大学(オランダ)・リュブリャナ大学(スロベニア)でも同プログラムを実施、その成果をまとめた展示会と国際シンポジウムは好評を博し、住経験を紹介するポスターセッションは住み方に関する国際交流や相互理解を深める機会として非常に有用であることを確認した。本計画はその経験に基づき発案されたものである。

住経験インタビューの実施校は年々その数を増しており、2023年度時点では6校(京大・北大・北海道大・慶應義塾大・近畿大・大阪工業大・明石高専・名城大(2017年まで))で実施され、毎年およそ100人の学生が住経験インタビューを実践している。また現在、インドのCEPT大学との共同プログラムの実施を調整中である。現在は、住経験インタビューを実際の住宅設計に応用する手法の研究段階に進んでいる。今回の展示およびセミナーは、日本発のオリジナリティの高い研究蓄積を国内外に発信する試みであり、大きな反響があるものと見込んでいる。

## 椿山 鼓ノ子

Konoko Tsubakiyama

### ●受け入れ先と受け入れ期間

Yale University School of Architecture  
Master of Architecture 1  
2023年7月～2026年5月

### ●研修の内容と方法

2023/07月～08月 (1/4半期)  
Architectural Foundations Courseを受講(建築を専門に学んだことのない25名の学生が対象)。建築・設計の基礎を身につけるとともに、異なる学問背景を持つ学生から多様な視点を学び、グローバルな環境で感性を磨く。  
2023/09月～2024/08月 (2/4半期)  
前期は、建築の基礎スタジオを通し、『かたち』の建築を学ぶ。  
キレイな作品をつくるよりも、まずは基礎を習得し、自分の過去の多様な経験をどう建築に落とし込むのが最適か探る。後期は実際に建設される住宅の設計を通して、実践的な「心地よさ」のデザインについて学ぶ。  
2024/09月～2025/08月 (3/4半期)  
夏のビルディングプロジェクトで、自らの手で住宅建設のプロセスにゼロから関わる。現場を知ることが、その後の自分の建築デザインのポリシーに活きるだろう。秋・春学期は環境デザイン・都市デザインを中心に学ぶ。  
2025/09月～2026/05月 (4/4半期)  
前半2年間で培った実力と個性を活かしてAdvanced Design Studiosを受講(Tatiana Bilbao, Vo Trong Nghia など著名建築家が率いる授業を選択する)。五感に特化したスタジオや、地域を巻き込んだ建築スタジオを積極的に選択。他選択授業で心理学と人類学の授業をとり、五感・感性について多角的かつ専門的に学び、デザインに取り入れる。

### ■主題

みえるものに左右される日々の連続のなかで、みえないものの価値が問われている。特定の場所や建物や環境下において、個人の感情や心理的幸福はどのような働きをし、どのような影響を及ぼすのかを心理学、社会学からだけでなく、インスタレーションやアートを通して探究し、物理的な快適さではなく人間が本来もつ『五感』や『第六感』の可能性をカタチにし、生きやすく暮らしやすい建築デザインや都市計画のありかたを紡ぎ出したい。

### ■活動歴

|            |                                                                                                                                                                       |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 2017年      | 任意ボランティア団体「制服プロジェクト」設立・代表                                                                                                                                             |
| 2017年      | 第21回ボランティア・スピリット・アワード コミュニティ賞受賞                                                                                                                                       |
| 2018年      | 第21回図書館を使った調べる学習コンクール(論文)優秀賞・毎日新聞社賞受賞 「高校生にもできるホームレス支援とは？」                                                                                                            |
| 2019年8月    | Hobart and William Smith Colleges Scholarship for Studio Art and Architecture受賞<br>(特待生として大学入学。卒業までの学費免除。)                                                            |
| 2019年8月    | International Student Association、広報担当、HWS,Geneva,NY                                                                                                                  |
| 2019年10月   | Habitat for Humanity加入・活動(住宅支援を行う国際NGO団体) HWS,Geneva,NY                                                                                                               |
| 2019年10月   | Eco representative加入・活動(学内の持続可能な環境問題に取り組む団体)                                                                                                                          |
| 2020年冬     | 建築設計事務所SANAA(妹島和代+西沢立衛)インターン、Tokyo,Japan                                                                                                                              |
| 2021年      | Laurel Society William Smith Honor Society(米国優等生協会)選出                                                                                                                 |
| 2021年      | International Enrollmentインターン、HWS,Geneva,NY                                                                                                                           |
| 2021年      | Architecture+Design Summer Research研究生に選出・活動、HWS,Geneva,NY<br>学内およびニューヨーク州の大学研究シンポジウムにて成果発表                                                                           |
| 2021～23年   | Woodshop Teaching Assistant、アトリオオペレーター資格取得、HWS,Geneva,NY                                                                                                              |
| 2021～23年   | Intro to Drawing Teaching Assistant、アート教授研究助手、HWS,Geneva,NY                                                                                                           |
| 2022年春学期   | Marchutz School of Fine Arts 交換留学、Aix en Provence,France<br>芸術交換留学プログラムにより選出され渡仏。アートとフランス語を専攻。<br>プロバンスの美術大学にて、油絵・デッサン・アートにおいての批判的思考の授業を履修。<br>学内授業とホームステイにて、フランス語習得。 |
| 2022年夏     | Atelier Tsuyoshi Tane Architects(建設設計事務所 田根剛)インターン、パリ                                                                                                                 |
| 2022年秋     | William Akira Sakow Scholarship 受賞(優秀な成績をおさめたアジア学生のための賞)                                                                                                              |
| 2019～2023年 | Dean's Listすべての学期で獲得(GPA3.5以上を所持する成績優秀学生に与えられる栄誉・学部長賞)                                                                                                                |
| 2023年5月    | 卒業時 SUMMA CUM LAUDE取得(卒業生最優等位賞)、<br>建築学研究論文最優秀栄誉賞受賞、メディア社会学首席賞受賞(ダブル・メジャー)、ローレル名誉協会賞受賞(リーダシップを評価された優秀女子学生の賞)                                                          |
| 2023年7月    | イエール大学院建築専攻 特待生入学                                                                                                                                                     |

## 高本 夏実

Koumoto Natsumi

### ●受け入れ先と受け入れ期間

ECAL/Ecole cantonale d'art de Lausanne  
ローザンヌ州立美術学校  
2023年9月～2025年7月（2年間）

### ●研修の内容と方法

2024/04月～06月（1/4半期）

上記の研究テーマをもとに、修士課程後期のディプロマで制作を開始する家具と、家具の背景にある文化的側面のリサーチを行う。特に、日本独自の文化に特別意識を向けるというよりも、全人類に普遍的な価値観・意識のあり方を調査する。これは、テーマとして述べた「非言語コミュニケーションツールとしてのデザイン」を検討する上で非常に重要なリサーチである。

上述のディプロマと同時進行で、中規模のデザインプロジェクトの制作を全期間を通じて行う。

2024/07月～09月（2/4半期）

建築の一部としての家具という視点から、椅子や机、照明器具などの、すでに一般化されたデザインの原点をたどり、分解・再構築していく。この再構築の際に、既存の家具の形状を再現するのではなく、未知の形状の可能性を探りたい。ここでは、実際の素材やモデルを用いて制作を行う。

2024/10月～12月（3/4半期）

具体的な家具デザインの検討・制作に入る。スケールモデルの作成から実際の素材の実験・調査などもこの時点でやりたい。また、SNS時代における最適なデザインの情報発信のあり方を、制作・流通・住環境への展開までの一連の流れを視野に入れた上で探る。

2025/01月～03月（4/4半期）

3/4半期同様、家具の制作期間。一連の研究はすべて、大学内工房を使用しての制作。

### ■主題

既に自明のものとして世に浸透している画一化されたデザイン手法の” 溶化 ” を大きなテーマに据え、住環境の主要要素である家具を高度な次元で使い手の意識に浸透させる手法を、非言語コミュニケーションツールとしてのデザインという観点から研究・制作する。

今日自国で使用されている家具の系譜をたどると、その大半が明治維新以降急進的に輸入された西洋諸国由来のものであり、これら特定の風土思想から発祥した様々な造形品は、一般的な「日本家屋」と今日の近代的な建物との不調和をたびたび生んでいる大きな要因でもある。ものそれ自体が孤立するのではなく、常に変容する住環境との調和により有機的な生き物のような様相を呈する柔軟性のあるデザインの可能性を、このSNS時代にどのように展開していけるのか。

日本で培った工芸技法と素材への知識をもとに、ヨーロッパの交差点として常に最新の文化と情報が集うスイスでの実践的な学びを織り交ぜていくことで、自身の根幹となるデザインアイデンティティをより強固にしつつ、新しい局面を開拓したい。

### ■活動歴

- 2023年1月 第71回 東京藝術大学卒業 卒業・修了作品展（東京藝術大学 / 東京）
- 2019年11月 BVLGARI MECENATE（ブルガリ銀座タワー / 東京）
- 2019年9月 Ventura Dubai 2019（INDEX / ドバイ）
- 2019年4月 Milano Design Week 2019（Galleria Rossana Orlandi / ミラノ）
- 2019年3月 KUMA EXHIBITION 2019（青山スパイラル / 東京）
- 2018年11月 COMITÉ COLBERT AWARD 2018 -現代における人と自然-（東京藝術大学大学美術館 / 東京）
- 2018年10月 富山デザインウェブ 富山デザインコンペティション2018（富山県民会館 / 富山）
- 2018年6月 「未来の大芸術家たち」 第4回東京藝術大学 平成藝術賞 受賞作家展（平成記念美術館ギャラリー / 東京）
- 2018年1月 - 第66回 東京藝術大学卒業 卒業・修了作品展（東京藝術大学 / 東京）

### メディア

- 2023年6月 AXIS web magazine (web magazine)
- 2021年2月 designboom (web magazine)
- 2020年7月 BSフジ『ブレイク前夜 ～次世代の芸術家たち～』出演（TV出演）
- 2019年6月 日テレ『nextクリエイターズ』出演（TV出演）

### 受賞歴

- 2019年 BVLGARI MECENATE / 入選
- 2018年 COMITÉ COLBERT AWARD 2018 / グランプリ
- 2018年 Toyama Design Competition 2018 / ノミネート
- 2018年 第66回 東京藝術大学卒業 卒業・修了作品展 / 平成藝術賞
- 2016年 リサイクルアート展 / 準グランプリ
- 2013年 佐藤太清賞公募美術展 / 佐藤太清賞

## 第31回 ユニオン造形デザイン賞

## ■テーマ

## 100年の建築



審査員

永山 祐子 氏

Yuko Nagayama

## ●プロフィール

有限会社永山祐子建築設計 取締役 一級建築士

1975 東京都生まれ  
1998 昭和女子大学生活科学部 生活美学科 卒業  
1998 青木淳建築計画事務所 入社  
2002 青木淳建築計画事務所 退職  
2002 永山祐子建築設計 設立  
2020～ 武蔵野美術大学 客員教授

## ●主な受賞歴など

世界で跳躍し未来を照らす建築家  
国内外の大型プロジェクトで活躍し、注目を集める建築家の永山祐子氏。

ドキュメンタリー番組「情熱大陸」(2023年5月14日放送)に出演されました。

主な仕事に「LOUIS VUITTON 京都大丸店」〈丘のある家〉〈カヤバ珈琲〉〈木屋旅館〉〈豊島横尾館(美術館)〉〈渋谷西武AB館5F〉〈女神の森セントラルガーデン(小淵沢のホール・複合施設)〉〈ドバイ国際博覧会日本館〉〈玉川高島屋S・C 本館グランパティオ〉〈JINS PARK 前橋〉〈TOKYU KABUKICHO TOWER〉など。現在、東京駅前常盤橋プロジェクト〈TOKYO TORCH〉、2025年大阪・関西万博〈パナソニックグループパビリオン「ノモの国」〉〈ウーマンズパビリオン in collaboration with Cartier〉などの計画が進行中。

主な受賞に「ロレアル賞奨励賞」「JCDデザイン賞奨励賞」(2005)、「AR Awards」(UK) 優秀賞(2006)〈丘のある家〉、「ARCHITECTURAL RECORD Award, Design Vanguard」(2012)、「JIA新人賞」(2014)〈豊島横尾館〉、「山梨県建築文化賞」「JCD Design Award」銀賞(2017)、「東京建築賞優秀賞」(2018)〈女神の森セントラルガーデン〉、「照明学会照明デザイン賞」最優秀賞(2021)〈玉川高島屋S・C 本館グランパティオ〉、「iF Design Award 2023 winner」〈JINS PARK 前橋〉など。

私たちが建築を設計する時、どのくらいの未来を予測して設計を進めているだろうか。一般的に木造の建築の寿命は30年、RC造60年程度とされているが、それ以上使われている建物もあれば寿命前に壊されてしまうものもある。石造りのヨーロッパの都市の景観はここ100年あまり変わっていない。日本の都市像は戦後復興後に出来ていることもあり、まだ100年も経っていない。RC造の寿命である60年先すら予測が不可能に思われる。特に近年の変化のスピードは益々加速し、私たちは実空間以外にも仮想空間すらリアルな世界として実空間と等価に扱うようになってきている。25年ごとに都市が大きな変革を迎えると磯崎新も図式化している。100年は変化の4サイクル。大きく都市が変わるのは災害と祝祭のサイクルがきっかけであるとも言われる。東京であれば、関東大震災、戦争、オリンピック、最近であればCOVID-19も入るかもしれない。予測不可能な未来、それでも私たち建築を設計する者は少なくとも数十年先の未来を思い描きながら設計をする。私たちが設計した建物がどんな未来に建っているかを。今回はあえて100年後という少し遠い未来を設定した。今回のテーマを考えるタイミングで102歳まで生きた祖母が亡くなった。祖母が生まれた100年前はどんなだっただろうと祖母の人生を思った時にこのテーマを思いついた。人間は100年生きられる生き物である。自分が生まれ、人生を終えるスパンで建築の時間をとらえてみたいと思う。100年後は遠い未来に思えるが、突然やってくるのではなく今現在の連続である。例えば伊勢神宮のようにモノが残る続けるのではなく20年に一度建て替わる(100年であれば5サイクル)という新陳代謝のシステムが建築であるということもできる。物質に縛られることなく自由に「100年の建築」を考えてほしい。

## ■作品応募件数/102件

## 年齢別

| 年齢    | 人数  |
|-------|-----|
| 16～19 | 16  |
| 20～21 | 29  |
| 22～23 | 32  |
| 24～25 | 17  |
| 26～27 | 5   |
| 28～29 | 3   |
| 合 計   | 102 |

## 地域別

| 地域       | 人数  |
|----------|-----|
| 北海道      | 20  |
| 東北       | 8   |
| 関東(東京以外) | 25  |
| 東京       | 15  |
| 北陸・信越    | 3   |
| 東海       | 4   |
| 近畿(大阪以外) | 10  |
| 大阪       | 4   |
| 中国       | 3   |
| 四国       | 3   |
| 九州・沖縄    | 6   |
| その他      | 1   |
| 合 計      | 102 |

## 職種別

| 職種         | 人数  |
|------------|-----|
| 専門学校       | 23  |
| 短大・高专      | 0   |
| 大学         | 36  |
| 大学院        | 27  |
| 設計・デザイン事務所 | 6   |
| フリー及び一般    | 10  |
| 合 計        | 102 |

※無職・アルバイト・休学中含む



# UNION DESIGN AWARD COMPETITION

## 審査講評

### 全体の講評

100年の建築というお題を考えていた時にわたしの中で明確にイメージがあったわけではない。自分たちの想像を少し超えた、かといって途方もない時間ではなく、1人の人間の一生より少し長い100年、を若い世代がどう捉え、建築という表現にしていくなかとても興味があった。100を超えた数の作品が集まりそれぞれに自分が想像しうる未来を予測しながら多様な提案が並んだ。全体の中で私が気付かされ、そして評価する重要なポイントとなったことは2つある。一つは建築である以上、場所性がきちんと活かされているかどうかである。その場所の持つコンテクストを100年というスパンで考えられたかというところがポイントだ。場の歴史から見たら100年はほんの一瞬の出来事も言える。場所が特定の場所であっても不特定の場所であっても建築をきっかけにその場所にどんなアクションが起こせたかが重要に思う。もう一つは100年は今という日常の連続であり、そんな自分のリアルな日常の中から真摯にテーマを見つけられたかどうかである。この2つのポイントが感じられる作品が受賞した。残念ながら今年は大賞がなかった。それはコンセプトは説得力があるけれど最終的な表現力がもう少しという作品、その逆もあり、両方を持っている作品が見つけれなかったからだ。今回のお題を通して私自身も建築の根源的なあり方を考えるきっかけとなった。

### 優秀賞 田村陸人

#### 作品名 Dwellings with a lifespan

100年先の未来の住宅地は敷地境界線がもっと緩やかになり、住宅同士が繋がりがあって新しい魅力的な共同体をつくっていくという提案。個々に起きている住宅の変化を住宅地全体で共有し、空いた場所を緩やかに繋いで有効活用していく姿は個々の空き家の活用を超えた新しい個人と共同体の在り方を提示している。境界線が緩やかになっていく姿は土地や家の所有そのものの新しい在り方を象徴しており100年後の未来の住宅地の姿を想像させられる。

### 優秀賞 谷米匠太

#### 作品名 Living house

私小説のように1人の人生に寄り添いながら変容していく住宅。始まりの4m2から最後の150m2まで家族構成の変化に合わせて小さなマイナーチェンジを含んだ増殖がされていく。小さな模様替えレベルのベッドの向きが細かく変わる様子や、エントランスが変わったりアプローチが変わったり、人生の物語に合わせて綴られる細やかなプランの変化を細かいところまでついつい目で追わされてしまう魅力的な作品であった。100年という一見長い時間はこのような日常の積み重ねの上にあることを再認識させられる作品であった。

### 優秀賞 桂良輔

#### 作品名 景に倣い、風景をつくる

かつて水路の町であった滋賀県伊庭町。昔は生活を支えていた水路が暗渠となっている現在の風景からまた100年をかけて水路の街に戻していくという壮大な計画である。未来を描くとき、ただ前を向くだけではなく過去に消えていった街の記憶を復活させて新しい風景を作る試みはとても素晴らしい。ぜひ実現させて欲しい。

### 優秀賞 中川颯人

#### 作品名 H家再生

能登半島地震での地震の実体験から家を廻る記憶の継承の大切さに改めて気づき、ただ壊して新しくするのではない、木造戸建て住宅を未来への繋ぎでいく方法の提案。従来の木造建築の物理的な耐用年数を超えて“愛着”という人々の想いによって延命していくことは現代の建築の存続を考える上でとても大事なキーワードである。

### 優秀賞 田中紘大

#### 作品名 浮かび上がる漁村

熊本県天草市崎津の漁村特有のコンテクストを象徴する風景であるカケとトウヤを護岸の侵食に合わせてあえて水上空間として展開していき、懐かしく新しい風景を創出させていく魅力ある提案である。今後気候変動によって海沿いの風景が変わる可能性がある中でもその状況にうまく適応していく未来志向の提案であり印象深かった。

### 奨励賞 織田可久瑠

#### 作品名 街の前世が作る街

東京の木密地域の記憶を保存しながら次の100年に繋げるために木造住宅を型枠に新しい建築を作る提案。外は緑に覆われた基壇のように見える塊の中はかつての木造建築の跡が残る記憶の空間。古いものを転写した新しい建築空間はファンタジーのある提案だが、実際に見てみたいと思わせる魅力があった。

### 奨励賞 山田紘平

#### 作品名 新築100年目の土塔

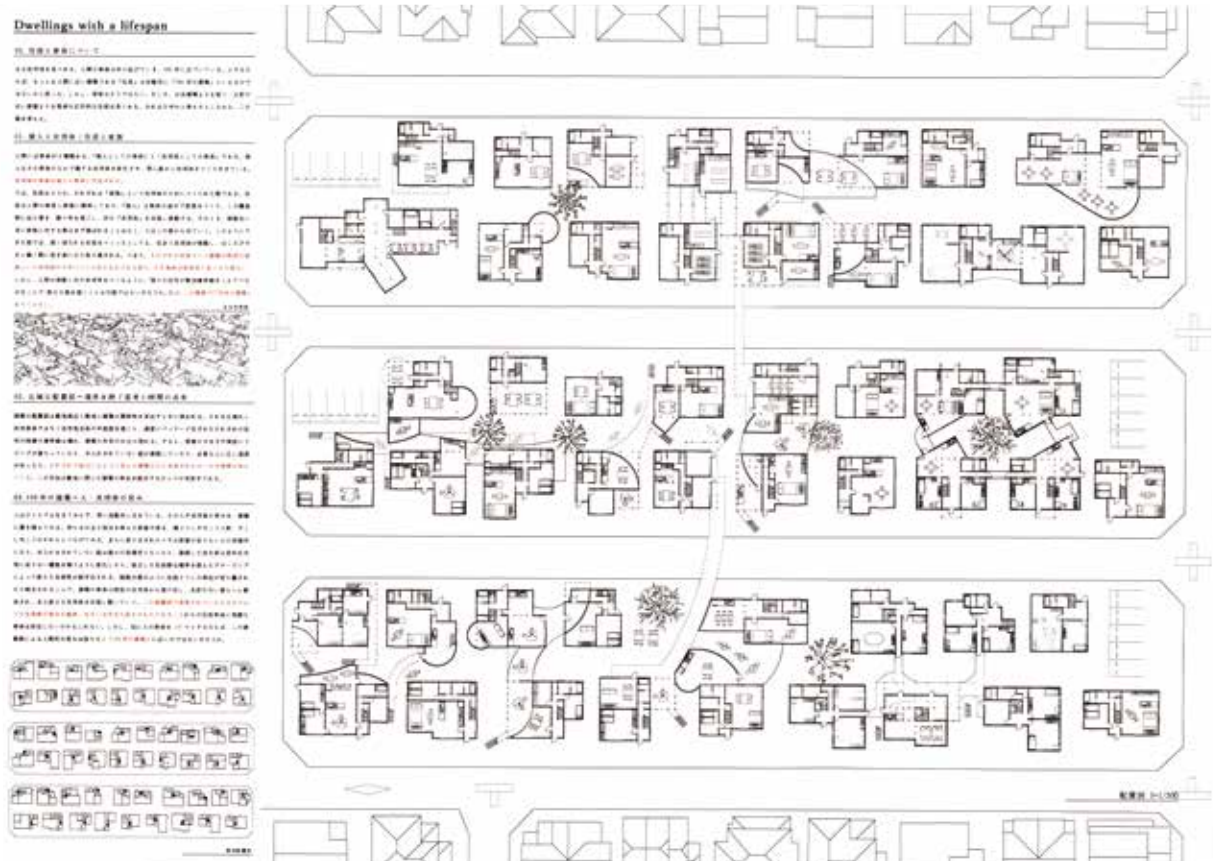
電信柱地下化に伴って街の風景の一部となっていたインフラの象徴が今度は塔状の地域のコミュニティスペースとなる。一定間隔に必ず立つ電信柱が塔となることで地域全体を俯瞰する新しい視点場となり、風景の中のシンボルとなっていくストーリーがとても面白いと思った。



デザイン賞

優秀賞

Dwellings with a lifespan



田村 陸人 東京科学大学 大学院 環境・社会理工学院建築学系建築学コース  
Rikuto Tamura

人はひとりで生きておらず、誰かと共同体をつくっては離れを繰り返し、常に流動的に生きている。そうして100年という寿命を全うする動物である。

では、住居はどうか。ここでは、長く保たれる建築をつくったとしても、住まう共同体がほころびだすと瞬間に取り壊される。つまり、それぞれの建築が特定の共同体のためにつくられたものである限り、その寿命は永くなり得ない。

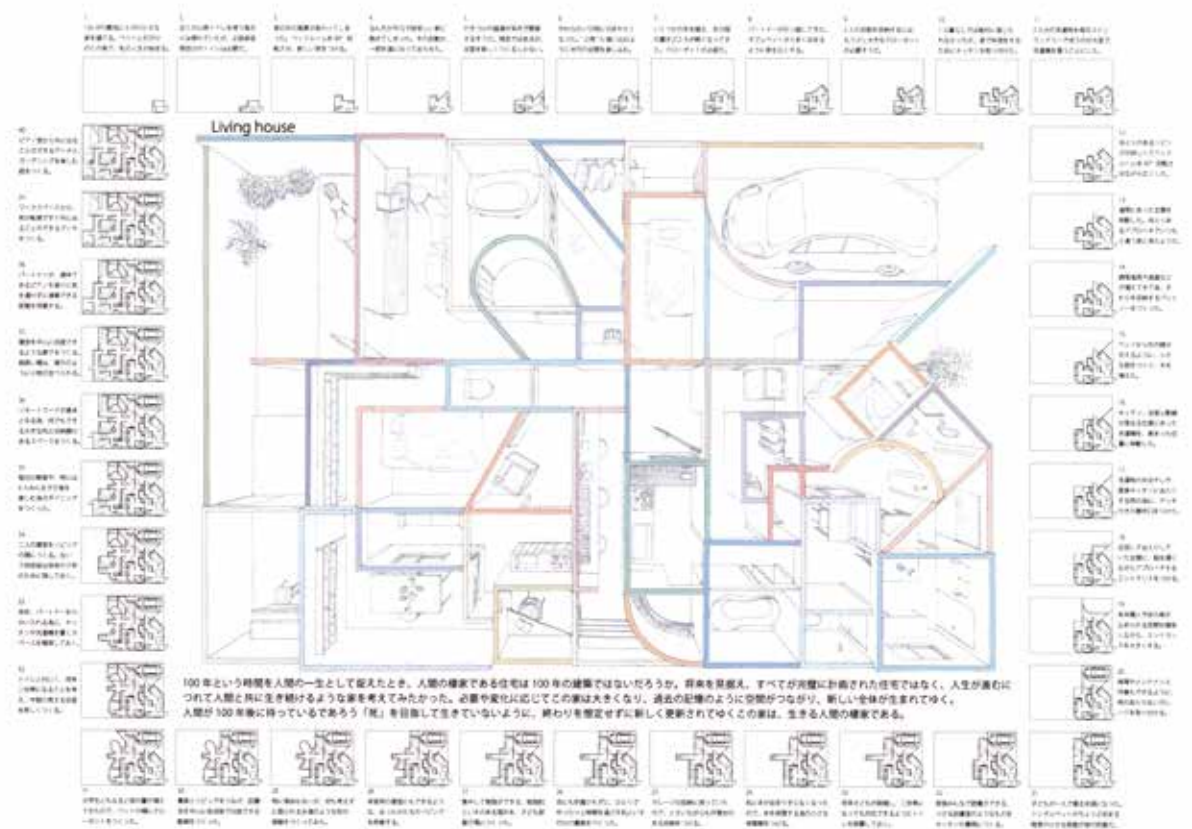
広域な配置図を描くと、独立したそれらに一定のルール

や時間の流れがみられる。そこで、前述した人の営みを住居に置き換え、敷地境界という枠組みをこえた建築の単位の切り離しや統合を行い、新たな全体性の創出を試みた。

この配置図で表現されているのは住居群の営みそのものであり、それ自体に明確な寿命はすでに存在していないかもしれない。しかし、仮に人の寿命を100年とするならば、この営みはまさに『100年の建築』ではないだろうか。

優秀賞

## Living house



谷米 匠太 株式会社関・空間設計 設計監理部  
Shouta Yagome

100年という年月は、人間にとって「死」までの一生である。  
その100年の間、家も人間と同じように成長し、歳をとる。  
本提案では、最初から完成され老いてゆくような家ではなく、そこに住まう人間と共に変化してゆく家を提案する。最初は、4㎡の家とは呼べないほど小さな建築が、150㎡の敷地に建てられる。公共トイレや銭湯を利用す

ることで、寝るだけの機能を持ったこの小さな家は、究極の都市住宅である。しかし、人間が成長するとともに、家も成長するのである。トイレや浴室、キッチン、クローゼット、ガレージ、中庭など、より豊かな生活や心地よい自分の居場所を、時間をかけながらつくり続けてゆく。人間が100年後に待っているであろう「死」を目指して生きていないように、終わりを想定せずに新しく更新されてゆくこの家は、100年を生きる人間の棲家なのだ。

デザイン賞

優秀賞

景に倣い、風景をつくる

～繕いによる町の新たなネットワーク～



桂 良輔 フリーランス  
Ryousuke Katsura

100年の建築を考えるとという事は100年前の建築に倣うということであり、過去・現在・未来という時間軸の中で建築を考えることでもある。フィールドワークと文献調査から得られたおよそ100年前の町の記憶である生活の跡に倣い、繕いという小さな建築操作で大きな風景を設計する。繕うということはモノとモノ・人・コトとの対話で

あり、都市部に見られるスクラップアンドビルドの一方通行の都市更新では気づくことの出来なかったネットワークが町に生まれる。繕いという現在進行形の行為は、これからの世代の人たちに技を伝えていくということであり、その行為がこれから100年の姿を描いていく。



優秀賞

## H家再生

～石川県能登町における被災住宅再生計画～



中川 颯人 信州大学 大学院 総合理工学 研究科 工学専攻建築学分野  
Hayato Nakagawa

本提案は、石川県能登町における被災住宅の再生計画である。

今回の対象となる石川県能登町のH家は、令和6年度能登半島地震において被災、自宅も半壊の判定を受けた。夫婦と娘2人、祖母の5人家族で、娘2人は能登を離れ生活している。住宅は東西の2棟からなり、以前は東側の住居で主に生活していたが、現在は被害の少なかった西側の住居で生活している。

Hさん夫婦にこれからのライフステージを尋ねると、正

直なところ、どうしたらよいか自身も分からないと話していた。そこで、H家のこれからの全体計画と改修計画を考えた。本提案は、東側の住居は今後を考えて、ひとまず残したうえで、西側の築71年の住宅を夫婦とその母のために改修、「100年の建築」にする提案である。現状では、家族の人数に対し空間に余剰があったため、積極的に減築し、ボイドを持たせる構成とし、このボイドは、動線・環境・構造の中心として機能し、H家の新たな中心となる。

デザイン賞

優秀賞

浮かび上がる漁村



田中 紘大 鹿児島大学 大学院 理工学研究科 工学専攻 建築学プログラム 建築、都市計画専攻  
Hiroto Tanaka

100年という時間の中で、我々をとりまく自然環境は絶えず変化する。建築とはその自然環境の変化から、一定の環境を保持しようとする場合が多い。本提案は、建築が自然にさらされながら変化し、今後100年、またはそれ以上先の未来における新しい建築景があらわれ、住まい方が変化する、というものである。敷地は熊本県天草市にある崎津集落である。漁村の護岸が、波の営力によ

て少しずつ浸食され、村の地盤がなくなっていく。これに合わせて住宅が更新される。村落内の住宅がそれぞれ更新されていく中で、崎津集落に現存する「カケ」と「トウヤ」という要素によって、集落の原風景や生業が保存されていく。コンテキストを継承しながら、長い時間の中で常に新しい姿があらわれる集落のありかたを提案する。



## 織田 可久瑠

Kakuru Oda

フリーランス

東京では、街の歴史を考えると100年前と100年後ではまったく違う風景が展開される。だから空間を通して街の歴史を感じられるように、100年前が100年後を作っていくような街を考えたい。

敷地は荒川と隅田川に挟まれた千住大川町にある木造密集地域一体で、そのままにしておくとは街にとってリスクを伴う木造住宅を型枠にして、その場所の土地、空間、時間のかたどったコンクリートの建築を作る。木密地域特有の狭小な隙間が構造になることで街が反転した空間になり、防火壁が作られるだけではなく、密集した住宅街だった空間は隣接する商店街に放たれた連続する洞窟のような空間になり、バラバラだった住まいは人々がともに住まうことのできる大きな集合住宅になり、広く強固なコンクリートの建築の屋上は街の新たな土地になり、まるで街の人々が知り得ない街の前世がつくる、新たな街の姿である。



街の前世がつくる街

東京では、街の歴史を考えると100年前と100年後ではまったく違う風景が展開される。だから空間を通して街の歴史を感じられるように、100年前が100年後を作っていくような街を考えたい。  
敷地は荒川と隅田川に挟まれた千住大川町にある木造密集地域一体で、そのままにしておくとは街にとってリスクを伴う木造住宅を型枠にして、その場所の土地、空間、時間のかたどったコンクリートの建築を作る。  
木密地域特有の狭小な隙間が構造になることで街が反転した空間になり、防火壁が作られるだけではなく、密集した住宅街だった空間は隣接する商店街に放たれた連続する洞窟のような空間になり、バラバラだった住まいは人々がともに住まうことのできる大きな集合住宅になり、広く強固なコンクリートの建築の屋上は街の新たな土地になり、まるで街の人々が知り得ない街の前世がつくる、新たな街の姿である。



デザイン賞

奨励賞

新築100年目の土塔

山田 紘平

Kouhei Yamada

広島大学 大学院  
先進理工系科学研究科 建築学

■共同制作者

李皓

(広島大学 大学院  
先進理工系科学研究科 建築学)

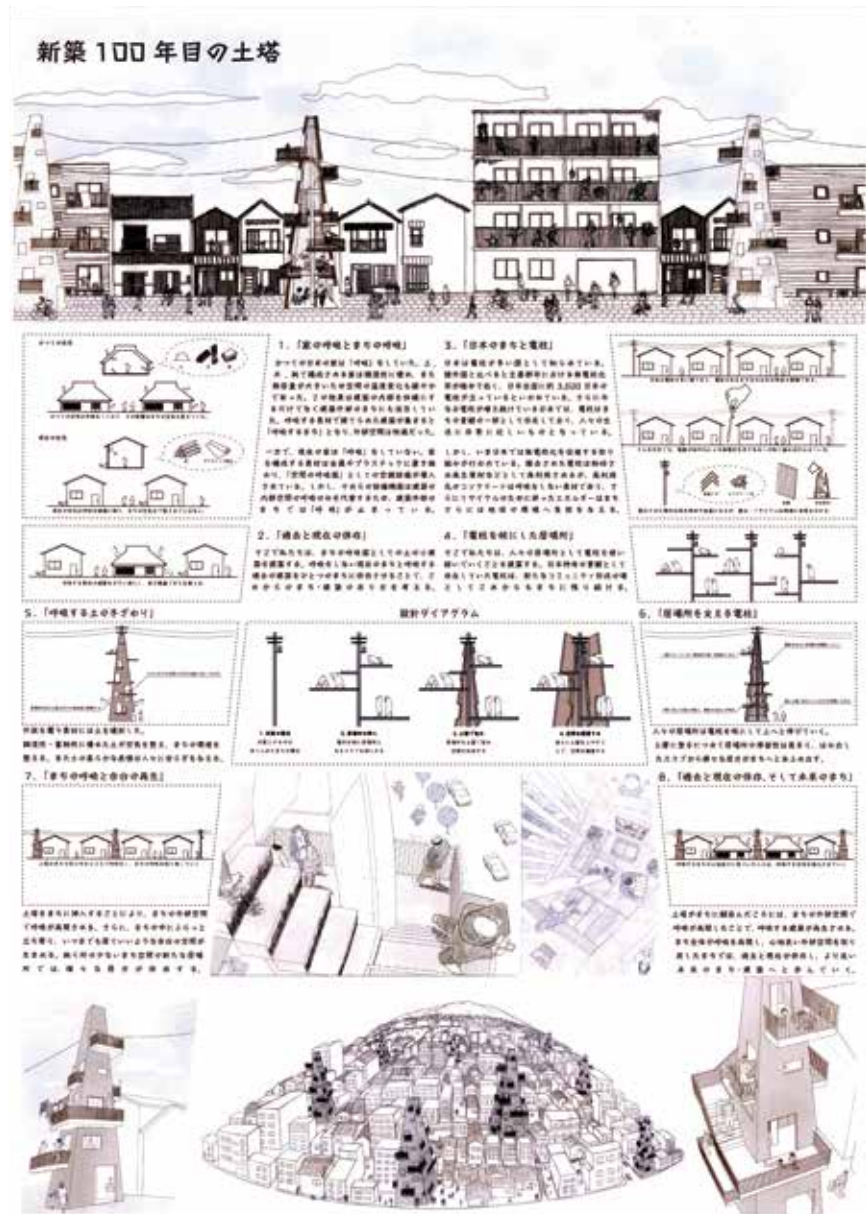
秋山 友希

(広島大学 大学院  
先進理工系科学研究科 建築学)

本作品のテーマは「過去と現在の併存から考える未来のまち」である。

かつて日本の住宅は呼吸をしていた。その呼吸は住宅の外の空気も整え、心地良いまちが広がっていた。しかし現在の住宅は呼吸を設備に頼り、まちの空気を整えることはない。そこで私たちは、無電柱化によってまちから消える運命にある電柱を核にした、まちの居場所となる土塔を設計することで、再びまちの呼吸を取り戻すことを提案する。

呼吸をしない現在のまちで呼吸をする過去の建築と併存する生活を通した心地良さへの気づきは「呼吸する未来の住宅」につながり、より良いまちを作り上げるきっかけとなる。



公益財団法人 ユニオン造形文化財団

■事務局

〒550-0015 大阪市西区南堀江 2-13-22

TEL.06-6532-8764 FAX.06-6533-1028

<https://www.uffec.com>